

註

- 1 本稿では、指輪を扱うにあたり、言葉の定義をする。
宝飾とは、素材に宝石と貴金属を用いて制作されたものをいう。装飾品とは、直接または衣服に着けて身体を飾るものである。貴金属とは、金、銀、そして白金（プラチナ）類をいう。アクセサリーとは、使用素材の限定を宝石と貴金属とに限らないものをいう。装身具とは、これらすべてを含む、最も広範囲の意味での身体装飾に用いる品物の総称とする。
山口遼『ジュエリーの話』 新潮選書 1991年 p.4
- 2 「野村総合研究所・成人女性のジュエリー保有数」20 - 40歳。40歳以上の世代を加えれば、さらに平均は上がる
2009年
- 3 草野千秋「指輪の流行 明治・大正期を中心に」『国際服飾学会誌』
No. 18 2000年
- 4 露木宏 『日本装身具史』 美術出版社 2008年 p.77
- 5 浜本隆志『指輪の文化史』 白水社 2004年 p.200
- 6 町田市立国際版画美術館所蔵 豊原国周 明治23年「見立春夜二十四之内」の「午前五時」「午前九時」「午後七時」では芸者姿に指輪を嵌め「午後一時」では束髪姿に読書中の女性が指輪を嵌める。
- 7 町田市立国際版画美術館所蔵 楊州周延 明治30年「真美人」36点のうち6点には、指輪着用場面が描かれる。「真美人 一」は、稽古に通う娘「真美人 八」は祭りの姿の娘「真美人 十四」は、和洋折衷姿の女学生「真美人 二十一」は年増の化粧姿「真美人 三十一」は年増が描かれる。
図版『明治・大正美人版画展』浮世絵 太田記念美術館 1993年 p.44
- 8 三好一『[ポスターと懸賞]明治大正昭和 日本のポスター』京都書院
1997年 p.247
- 9 『国民之友』 平民主義を掲げて急速な成長を遂げた
『風俗画報』 明治・大正期の風俗雑誌 西洋のグラフ雑誌の影響を受け、始めは版画、のちに写真が挿入された。全国のあらゆる風俗現象や事象などに絵画を使用することで網羅収集して、後世に伝え、様々な考証や研究に供する。

『時事新報』 独立不羈、国権皇張をモットーとする
 『女学世界』 博文館 発刊之辞「女子に必要な事柄を網羅し、学を進め、智を開くと共に其徳を清淑にし其情を優美にし」とある。
 『婦人世界』 実業之日本社 女性雑誌・料理・育児などの実用記事や家庭婦人の修養記事などを売り物にした。
 『演芸画報』月刊演劇雑誌 東西の大小劇場の舞台写真と芝居・見たままなどの歌舞伎を中心とした評論・芸談、研究など各種記事を掲載し、演劇総合誌として親しまれた。
 『婦人画報』女性月刊誌 視覚に訴える画報の形式を取り入る。

- 10 石井研堂『明治事物起原』馬鹿の番付 春陽堂 1944年
- 11 平出鏗二郎『東京風俗志 上下』 筑摩書房 2000年 下巻 p.92
- 12 樋口一葉『闇桜』1892年3月
『現代日本文学全集 4 樋口一葉』 筑摩書房 1956年 p.199
- 13 『日本現代文学全 5 尾崎紅葉集前編』講談社 第1章(1)の2
『金色夜叉』 pp.204-205
- 14 内田魯庵「指環」pp.35-54 『時好』掲載 明治38年5月
- 15 明治26年来日したベルギー大使夫人の日記
エリアノ・メアリー・ダヌマン著『ベルギー公使夫人の明治日記』 中央公論社
1992年 p.8
「私は皇后陛下のご様子に魅了された。明らかにパリから直接取り寄せられた衣裳をお召になっていた。それはシンの錦織のサテンで胴着は、薄いピンクであった。装飾品として、大きなダイヤのブローチと日本の星章をお付けになっていた。(明治26年10月10日の日記)
1992年 p.27
明治27年1月1日 皇后陛下の華麗な頭飾りと首飾りには最高のすばらしいダイヤモンドが散りばめてあった。手袋着用のため指輪は描かれない。
- 16 パリュール(Parure)ブレスレット、ブローチ、リング、イヤリング、ネックレスなどの装身具が全体にマッチしたデザインで製作されたセットをいう。
近山 晶著「宝石・貴金属大辞典」 柏書店松原 1989年

17 高島屋発行『新衣裳』 第十四号「豪州土産」明治36年4月5日発行 高島屋

18 (注4)p.111

19 山本松谷(昇雲)明治3年生 - 昭和40年没

山内家家臣の子として高知に生まれる。名は茂三郎、別名に小斉・昇雲がある。上京後は、滝和亭の門弟となり南画を学び、明治29年第1回絵画共進会に美人画を出品、2等賞を得る。また、明治27年より23年間描き続けた『風俗画報』の挿絵は彼の画業の大半を注いだライフワークといえる。横浜の女学校の絵画講師や天賞堂や三越の指輪や櫛・笄・金銀銅器のデザイン、染織物の原画描きなどの仕事をして生計を立てた。

図版『明治・大正美人版画展』浮世絵 太田記念美術館 1993年 p.4

20 川村邦光『民俗文化論』京都造形芸術大学通信教育部 2008年 p.76

明治44年4月の『東京朝日新聞』によると、女学生の愛独書の順位1に、『女学世界』である。

21 夏目漱石『それから』1909年6月 三千代は綺麗な手を膝の上に重ねた。下にした手に指輪を嵌めている。上のは細い金の枠に比較的大きな真珠を盛った当世風のもので、三年前、結婚の御祝として代助から贈られたものである。

『現代日本文学全集 11』筑摩書房 1954年 p.91

22 露木宏[近代装身具の発生とその変遷]『ジュエリーの歩み 100年』美術出版社 2005年 p.21

23 (注21)p.19

24 石井研堂『明治事物起原』白金の溶解 春陽堂 1944年 p.381 p.1043

25 **現存する専門店の創業と特徴**

天賞堂 創業明治12年 印判店であった。明治21年頃から時計や宝飾品などの輸入物を取扱い始め、指輪の広告を一早く雑誌に掲載し、当時では珍しかったショーウィンドウを設けるなど、数々の新しい手法を導入。

明治43年、日本で初めての本格的な輸入宝飾品カタログも天賞堂の物であった。服部時計店(現和光) 創業明治14年

植田商店(現植田ジュエラー) 創業明治17年 明治37年、結婚指輪の習慣が

取り入れられ始めたばかりの日本で、いち早く結婚指輪を売り出すなど、新しい文化を取り入れ、流行を生み出す事に積極的であった。

田中商店（現田中貴金属） 明治 18 年創業

丸嘉 明治 21 年創業 岡田三郎助の『ゆびわ』の絵の左下には指輪のケースが描かれ、そのケースの色から、女性が身につけているダイヤモンドの指輪は丸嘉のものであるといわれる。

御木本真珠店 明治 32 年 明治 26 年アコヤ貝を用いた半円真珠の養殖に世界で初めて成功した。明治 38 年真円真珠の養殖も成功させ、明治 40 年、本格的な金細工工場を開設するなど、真珠の生産からジュエリーの製造までを一貫して行える体制を日本で初めて整えた宝石店となる。

工場の創業も揚げる

明治 11 年 天野慶二郎 天野工場創業

明治 19 年 村松萬三郎 第一工場創業

明治 19 年 松山亀太郎 松山工場創業

明治 23 年 中村商店創業（後の細沼貴金属工業）

明治 25 年 山崎亀吉 清水商店創業（後の山崎商店）

明治 40 年 御木本金細工工場操業

- 26 福富太郎著「美人画因縁ばなし」『描かれた女の謎』新潮社 2002 年 pp.143 - 144
- 27 山本武利・西沢保編『百貨店の文化史 日本の消費革命』世界思想社 pp.309-315
百貨店発行の逐次刊行物リスト（土屋礼子作成より抜粋）
『時好』明治 36 年 8 月～明治 41 年 5 月 三越最初の月刊誌 定価 1 円 12 銭
一般広告も 1 頁あたり 30 円の広告料で掲載していた。内容は、商品写真のグラフィック、文芸欄、店の催事などの紹介をする。改題して『みつこしタイムス』となる。
『新衣裳』明治 35 年 3 月～大正 9 年 高島屋
『衣裳』明治 40 年 1 月～明治 41 年 8 月 大丸
『婦人くらぶ』明治 41 年 10 月～明治 44 年 11 月 大丸
『家庭のしるべ』明治 37 年 7 月～明治 38 年 12 月 白木屋改題して『流行』となり
明治 39 年 1 月～ 2 月白木屋
他に『今様』は明治 39 年～大正 15 年 9 月 松屋発行の季刊誌がある。
- 28 近山晶『宝石』全国宝石学協会 1990 年 p.90
- 29 『ジュエリーコーディネーター検定 3 級』 日本ジュエリー協会 1999 年
装身具の起源について、歴史家や考古学者の多くは飾身、装身具の起源について

様々な意見を述べている。Pp.14 - 15

ホモ・ルーデンス(人間の遊び)生物が生きていく上で必要な体力・知識・経験などを自然に得るために備わった性質

30(注4) p.19

31 北川東子編訳・鈴木直訳『ジンメル・コレクション』
筑摩書房 2002年 p.25

32 商工社編『日本全国商工人名録』東京合資会社 1914年 pp.26-pp.40

33 永井荷風著[見果てぬ夢『新橋夜話』] 岩波書店 1987年 p.289 p.291

34 永井荷風『夢の女』岩波書店 1903年 p.36